『TRUE VIEW』<03> 2009 JANUARY　掲載

BOOK INTERVIEW

photo:Rintaro text:Yukie Hamano

嶋田賢三郎

「責任に時効なし」小説「巨額粉飾」

アートデイズ 1890円

企業は矛盾する複合体 譲れない信念を忘れずに

3年前、ビジネス界を揺るがす巨額の粉飾決算事件で事実上の倒産に追い込まれた老舗カネボウ。社長、副社長、常務取締役の3名が証券取引法違反容疑で東京地検特捜部に逮捕され、5年間で2150億円もの粉飾に加担したとして、中央青山監査法人の公認会計士4名も逮捕される異例の事態に至った。

この時、社長らと共に逮捕されたのが、元財務経理担当役員で、本書の著者である嶋田賢三郎だ。粉飾容疑の対象となった13年度と14年度のうち、14年度の粉飾を主導したとの嫌疑であったが、会社に残っているはずの資料が失われ、嶋田もなぜかまで潰えました。しかし、この歴史的財産であるコーポレートブランドは、多くの真面目な従業員やOBにとって誇りであり命の源泉だった。にもかかわらず、社会はもとよりOBや従業員に事件の深い実相が知られていなかった。そんなことでいいはずがない。それが本書を書いた大きな動機です。

そして私自身も過去の30年間、一番重要な時期に奉じた世界にけじめをつけずに次の人生に進めなかった。私の場合、それが小説という形態で自分の思いを形にすることだったんですね。それと、CPA（公認会計士）業界の池に石を投げ入れ事件を詳らかにすることで、少しでも粉飾事件を減らしたいという思いがありました。カネボウ事件という大きな犠牲を払いながら、その後も大小合わせて10近くの粉飾事件が起きており、いずれも監査法人が絡んでいる。そこが本当にしっかりすれば、粉飾事件も少なくなるでしょう。権力者を除いては、粉飾ほど無益で愚かなことはありませんから」

著者が執筆に要した3年間は、30年間の会社員人生をひもとき、自分自身と向き合う作業だったようだ。

「あれだけのすさまじい事件を書くにあたって一番難しかったのは、会社や事件関係者の負の部分と再度真正面から向き合わなきゃいけないことでした。人間、そういう作業はできれば避けたいものですが、隠された実相を赤裸々にして事件の本質を伝えるには、わが身を含めて一度素っ裸にしないとダメ。それはある意味ノンフィクションを書くよりキツくて、小説執筆はリアリティーの世界に身を投ずることを強いるものなんだなぁと思いましたね。僕は小説をもうちょっと甘く考えていたんですが（笑）。腹をくくって内側に押し込むような力で人間を描き始めるまでに、ほぼ1年かかりました」

その際役に立ったのが、かつて培った管理部門での経験だという。

「小説を書くというのは人間を描くことですが、事業の管理という仕事は人を管理するのが一番難しく、しかもそれがとても重要なんです。経営成績などの数字自体は結果として出てくるだけで、数字が出てくる前に人間の心のうごめきがあるわけです。そのうごめきから不埒な数字や頑張った数字が出てくる。管理の仕事はそこにある人の心を読む作業が必要になります。それは小説執筆に似たところがあると思いますね」

物語は、嶋田の分身であるトウボウ常務取締役・番匠啓介を主人公に展開。番匠が発する心の叫びはあまりにリアルで痛切だが、その一方で冷静に状況を見極め行動するたくましさを感じさせる。

「どんな企業でも、古い会社ほど権力者をピラミッドの頂点とするギルド社会が存在します。それは大きな事業を成し遂げるためには必要であり、組織で働く以上避けては通れない。私がビジネス界に入ったのは、激烈な競争の中に身を置いて、企業を大きくしていく仕事に憧れたからです。大きな資金を自分の裁量で動かし、大勢の人間を差配するのは男のひとつの夢ですから。それが、理想とかけ離れた会社の実情が見えてくるにつれて、辞めたい気持ちの片方で『この会社をなんとかしたい』と思うようになった。サラリーマンはみんな、その思いで20年、30年生きてると思うんです。

結果、私はサラリーマンとして最悪の事態にぶちあたったわけですが、そんな状況の中でも悪いことばかりじゃないという部分も伝えたかった。実際、いいことや楽しいこともあるし、そうでなきゃやってられませんから。やはり私はビジネスマンに頑張ってほしい気持ちが強いんです」

おかしいと感じても、上司の方針に異を唱えると左遷か村八分に遭う可能性が高いのが会社の現実。会社員時代、上司に反対して2度の大きな左遷という憂き目に遭いながら、最終的に次期社長候補と目された嶋田にそのヒエラルキー社会を生き抜くコツを聞いてみた。

「大企業にはいろんな人がいて、たとえ窮地に陥っても、正しい頑張りをしている限り誰かまともな人が見てくれているものです。大きな組織になれば、その中に力のある方がいらっしゃる。もし自分に力がなければ、そういう人に腹を割って相談し、力を借りるのもひとつのやり方です。よく見極めないと危ないですよ、見誤ると狙われますから。そして、それなりの力を得てからも、正義の月光仮面を気取ったって問題は絶対解決しません。企業というのは、悪いように見えてよく見るとそれがいいこともある。〝矛盾する複合体〟なんです。ただし、コレを譲ったら会社が倒産するとか、未曾有の危機に直面しかねないとか、そんな事態になれば、信念を持ってまっしぐら、でいいと思います。社会の正しさと会社の正義は違い、みんなその狭間で苦労しているんです」

本書の中で嶋田は、カネボウで粉飾の種が撒かれたのは30年前であることも明かしている。時効によって罪を問われなかった歴代経営陣への憤りは書名の通りだ。「これでようやく次の一歩を踏み出せる」と話す彼の、作家としての今後と新しい人生は重なるのだろうか？

「チャンスを頂ければ、書きたいものはたくさんあります。この小説が当事者である私以外に書けないものだったように、30年間のビジネスマン経験からくる感性は普通の小説家の方にはない部分だと思うんです。次回作でもビジネスマン時代に私が体験しえた経験からくる情景をふんだんに盛り込みたい。その自分らしい呼吸を大切にして作品に込めることで人が感動してくれたら、こんなハッピーなことはありません」

化粧品や繊維の名門企業トウボウは、長年〝信頼のブランド〟のイメージを保ってきたが、内実は粉飾会計にまみれていた。常務取締役で経理責任者の番匠啓介は粉飾決算に反対し孤軍奮闘を続けたが、債務超過が明るみに出て経営陣と共に逮捕される。被疑者となった番匠がたどる奇跡の挽回劇と、大企業の衝撃の内情をつづった意欲作。

Kenzaburo Shimada

1946年生まれ。関西学院大卒業後、早稲田大学大学院を経て、鐘紡株式会社（後のカネボウ）に入社。同社の対外的責任者として再建に奔走するも有価証券報告書虚偽記載の疑いで逮捕される。しかし、身の潔白が証明されて不起訴。この経験を生かした小説を上梓。